

Digital Cinema NOW

124

映画興行のトピックス

川上 一郎

さて、今月号では世界の映画興行業界で話題になっているポップ・アップ・シネマ、ルーフ・トップ・シネマそしてシークレット・シネマ等のトピックスについて紹介していく。

ポップ・アップ・シネマは、言葉通りにその場でシネマスクリーンが立ち上げてくる空気膨張型スクリーンを使用した上映形態である。車社会の到来で、日本国内にも数多くのドライブインシアターが存在し

ていたが、車社会の代表である米国でも実働しているドライブインシアターは500スクリーンにまで激減している。常設型の屋外上映には天候に左右されることや、周辺の再開発が進むことにより周りが明るくなりすぎるとスクリーンのコントラスト低下や、周辺光の映り込みが発生するなどの問題がある。

空気膨張型のスクリーンは、最も安価なシステムでは10万円台の軟質塩化ビニール製の製品から、30m幅までの大型スクリーンまで品揃えされた高級製品まで幅広く供給されている。最も、幅広く製品を展開しているのがドイツに拠点を置くエアスクリーン社 (<http://www.airscreen.com>) である。最

上段の写真は、スペインで開催されたAir-Fight イベントの様子であり、スピーカー設置用の足場が周辺に設置され中央部に30mの巨大エアスクリーンが鎮座している。中段(上)の写真はキャッスルヒルの広場に仮設されたオープンエアキッズガーデンである。映画鑑賞ゾーンや売店コーナー、そしてテントハウスなどが併設されている。中段(下)は、ベニス映画祭でのイベント広場に設置されたエアスクリーンである。下段の写真は、30m幅のエアスクリーンと中央に立つ二人のスタッフである。

固定施設として観客が来るのを待ち受ける興行形態と異なり、観客のいるところ・集まる場所にエアスクリーンを設置して上映を行う最大の利点は機動力にある。また、集客予想人数に併せてスクリーンサイズを選択できることから、レイアウトや付帯施設の設計にも柔軟に対応できるところが最大の利点である。この、エアスクリーン社の設置風景は、10年以上前にオランダ：アムステルダムで開催されたIBCの会場で見かけたことがあるが、専用の静音型コンプレッサーを使用して10分程度の短時間で10mサイズのスクリーンを立ち上げており、手際の良さが印象に残っている。日本での各種イベントでも、このタイプの空気膨張型スクリーンの利用はもっと増加して良いと考えている。

さて、この出前型映画上映で最も機動力があるのがシネマトランスフォーマ社 (<http://cinetransformer.com/>) による専用トランスフォームトレーラによる上映システムである。4年以上前から米国での各種上映イベント等で見かけてきたが、最新モデルでは4DX対応使用となっている。



SPAIN:AirFight



Castle-hill OpenAir キッズガーデン



ベニス映画祭



30mAirScreen
<http://www.airscreen.com/>

© 2017 The AIRSCREEN Company - www.airscreen.com
AirScreen によるポップアップシネマ



ラスベガス：コスモポリタンホテル



オーストラリア Limes Hotel(Brisbane)



ロンドン



ロンドン：The SOHO Hotel



ノルウェー：ベルゲン

ルーフトップシネマ

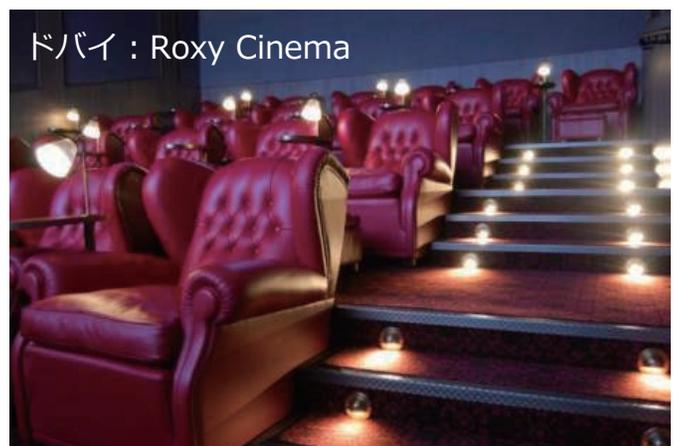


ロンドン：Balham

トレーラの張り出し部分にスクリーンが設置され、トレーラ長手方向と平行に座席を配置した仕様となっている。トレーラ長手方向に座席を配置した設計では42席のモーションライド座席を配置できる。添付写真の配置では若干座席数が少なそうであるが、同社のサイトではトレーラ後部に商品展示ブースを設置した事例や、ファッションショーの花道を設置するなどの様々なバリエーションが紹介されている。2D/3D対応型では観客定員88名であり、ミニ売店やトイレ付きなどの豊富なバリエーションが用意されている。当然のことながら現場中継車向けモデルや、災害現場派遣用救急処置室を搭載したモデル、移動型IT教室のモデル等も提案されている。

筆者の小中学生時代には、文部省特選映画を学校から特別授業として鑑賞する機会

があり名作映画の世界に入り込んだ体験はいまだに記憶に残っている。日本の映画興行全盛期には7,000スクリーン以上が稼働しており、地方でも国鉄の急行停車駅には東映・東宝などの直営館や洋画専門館等の映画館が当たり前のように立地していた。現在では、県内にシネコンが数カ所しか立地していない県が数多く有り、最も多感な幼少年期に映



ドバイ：Roxy Cinema

プティックシネマ



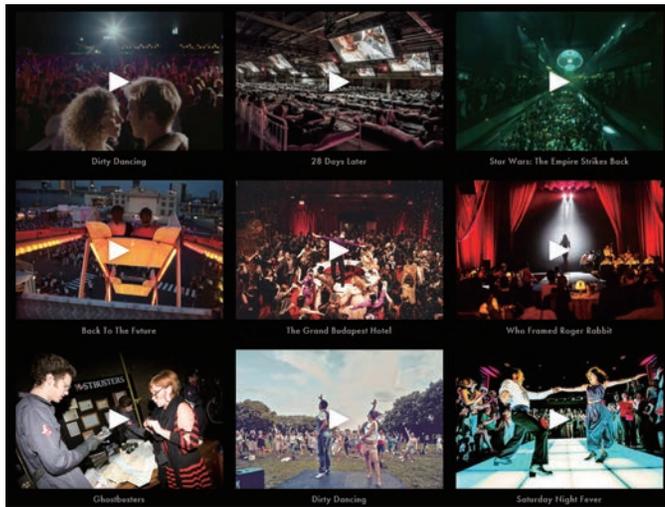
最新の4DX対応トレーラ



4DX内部



トレーラシネマ (<http://www.cinematransformer.com/>)



6月 22日 Secret Cinema x Glastonbury
公開・主催者: Secret Cinema

シークレットシネマ <https://www.secretcinema.org/>

画を鑑賞する機会は確実に減っている。

16mm フィルムライブラリーが各地の図書館に整備されていた時代には、映写講習を受けたボランティアの方々が映写機を借り受けて出前上映を行っていたが、デジタル化に伴うセキュリティ強化対策の功罪としてデジタルシネマの画質で鑑賞するには上映館に向くしか無い。

このトレーラ型上映システムであれば、デジタルシネマの画質と音響効果を学校の校庭で堪能できることから、デジタル時代の究極の情操教育として、変な話題ばかりで世間を騒がしている文部科学省には真剣に考えていただきたい。

日本の現場中継車の特装会社であれば充分に対応できそうであり、蛍光体励起型レーザー光源のDCI準拠プロジェクターと内装材の選定や吸音材の配置など試写室設計のノウハウがある設計者と連携して日本の

待している。

さて、欧米の夏場で拡大を続けているのがルーフ・トップ・シネマである。文字通り、ホテルやビルの屋上に仮設スクリーンを設置して、黄昏れていく夜景を見ながらシャンパンやビールを傾けながら映画を楽しむオープン・エア・シネマの代表格である。最上段の写真は、ラスベガス中心部の再開発地域であるシティーに立地するコスモポリタンホテルの屋上（とは言っても低層階部分の屋上にあるプールサイドである）で週末毎に上映が行われている。ホテル宿泊客は自由に映画鑑賞ができるが、ベッドやパティオの利用は有料となる。中段の写真はロンドン郊外のビル屋上で夏場に開催される上映会であり、映写室がポップコーンの容器を模しているところが面白い。最下段は、ノルウェー第二の都市であるベル

道交法準拠の移動上映システムを開発するベンチャーが出てきてくれることを期

ゲンのプールを利用した上映であり、ルーフ・トップでは無いが欧州各地で屋外プール等を利用した上映は頻繁に行われている。6月末の夏至の季節では日没が深夜10時過ぎとなるために黄昏時から日没までのトワイライトタイムをしっかりと楽しむ生活習慣が定着しており、日本人の感覚からすると昼寝しないとつきあい切れなく感じる場所は致し方ない。

また、小規模な映画館の運営形態として着実に数を増やしているのがブティック・シネマである。最上段の写真はオーストラリアのLimes Hotel(Brisbane)の屋上にあるルーフ・トップ型ブティック・シネマで遠景の町並みを見ながらワインやビールを傾けながら映画を楽しむことができる。二段目の写真はロンドンのThe SOHO Hotel内のイン・ハウス・シアターであり、シャンパンを傾けながら宿泊客だけが映画鑑賞を楽しむことができる施設である。大手ホテルチェーンでは、会員専用のフロアやラウンジを設置することが多いが、これからのサービスの形態としてホテル内での



視聴覚補助機器

特別試写室は大いに注目される。三段目の写真は同じくロンドンの Balham に立地するブティック・シネマであり大きなクッションと二人がけのソファでゆっくりと映画鑑賞ができるスタイルである。そして、最下段は中東ドバイの Roxy Cinema でありゆったりとしたリクライニングチェアによる鑑賞スタイルである。

この上映形態は、ダイン・イン・シアターの経営形態と異なり、すでにルームサービス等のバックヤード設備が存在しているホテルでの運営が最も固定費負担が少なく、かつ他のホテルとの差別化が図れる新しいサービス形態であり、数年後にはラスベガスの主要ホテルではスイート宿泊客専用のイン・ハウス・シアターが常識となってくる可能性がある。

さて、5年近く前から英国で始まったシークレットシネマ (<https://www.secretcinema.org/>) は、料金や内容を隠しておいて、参加希望の登録者を募り、次に、開催場所、時間、参加時の服装などの情報を小出しにしながら行う演出されたイベント型シネマであり、欧州を中心にリピーターを増やしてきている。これまでの開催内容を紹介するサムネイル画像を貼り付けているが、映画のワンカットをモチーフにしたパフォーマンス等の演出で盛り上げながら映画鑑賞を楽しむ、全く新しい映画興行のスタイルである。このイベント内容については、“他人に漏らしてはいけない”

と申し込み画面にも記載されており、これまでの客席に出演者が紛れ込んでいたりするハプニング演出とは全くことになっていることから、すっかり定着してきている。ただし、次回開催予定日などの告知は1ヶ月前程度からなので、英国に自由に渡航できる方で無いと参加は難しい。

米国では、メディアに対するアクセシビリティ（国家緊急時の通達が視聴覚障害の方々にも円滑に行える手段を担保する為の法律）が法律で決まっていることから、テレビ放送でのリアルタイム字幕表示や補助音声などが整備されており、一定の規模の映画館では上映スケジュールの表示に HI (Hearing Impairment: 聴覚障害者対応の字幕表示機器) や VI (Visually Impairment: 視覚障害者対応の補助音声機器) と表示されており、字幕や音声補助装置の貸し出しが行われている。ドルビーはカップホルダーに差し込んで自分見やすい位置に字幕表示機を設置できる CaptView と、マルチチャンネルレシーバーの Fedelio を販売している。また、映画館向け音響機器等を販売している QSC は赤外線エミッターによる伝送方式で、グラス型やカップホルダー差し込み型の字幕表示装置とヘッドホン型レシーバーをシステムを販売している。ソニーは一見すると AR グラスにも見える透過型グラスに字幕を表示する装置を販売している。

DCI 規格の音声チャンネル割り当てに

は最初から、HI、VI チャンネルが割り当てられており、かつ一つの DCP パッケージで 5 カ国語にまで対応できることから、2020 年の東京オリンピックではこの視聴覚補助機器を有効活用して日本映画の最新作を多言語で字幕表示や補助音声を提供すれば、多数の外国人観光客が最新の映画作品を楽しむ事ができる。

また、冒頭でも紹介したトレーラ型シネマを複数台用意して、この視聴覚補助機器を搭載して選手村に常駐させれば 10 カ国語以上の多言語で最新の日本映画に触れてもらえる絶好の機会となると筆者は確信している。

5～6 カ国の言語を話せる人が圧倒的に多い北欧の国では、デジタルシネマ黎明期から各国の映画振興委員会が多言語での字幕データを打ち込んだ DCP 作成に対して助成金を付けており、日本語は一步海外にできれば全くマイナーな言語であることを認識して、多言語での DCP 対応字幕データ作成に対する国家支援を是非検討していただきたいものである。アニメやゲームを主体にした映像産業支援機構が形としては存在しているが、このような議論がされたことは全く無さそうである。

Ichiro Kawakami
デジタル・ルック・ラボ